

鶯宿梅

「いとをかしうあはれに侍りしことは、この天曆の御時に、清涼殿の御前の梅の木の枯れたりしかば、求めさせ給ひしに、某主の藏人にていますがりし時、承りて、『若き者どもは見え知らじ。きむぢ求めよ。』とのたまひしかば、一京まかり歩きしかども、侍らざりしに、西の京のそこそこなる家に、色濃く咲きたる木の、様体うつくしきが侍りしを、掘り取りしかば、家あるじの、『木にこれ結ひ付けて持て参れ。』と言はせ給ひしかば、あるやうこそはとて、持て参りて候ひしを、『なにぞ。』とて御覧じければ、女の手にて書きて侍りける、

勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかが答へむ

とありけるに、あやしく思し召して、『何者の家ぞ。』と尋ねさせ給ひければ、貫之の主の御女の住む所なりけり。『遺恨のわざをましたりけるかな。』とて、あまえおはしましける。繁樹、今生の辱号は、これや侍りけむ。さるは、『思ふやうなる木持て参りたり。』とて、衣かづけられたりしも、辛くなりనికి。』とて、こまやかに笑ふ。

【口語訳】

(繁樹が) 「たいそう興味深くしみじみと感じましたことは、この天曆の御代(Ⅱ村上天皇の御治世)に、清涼殿の御前の梅の木が枯れてしまったので、(その代わりになる木を、天皇が)お探させになりましたところ、誰それ殿が蔵人でいらっしやった時、(勅命を)お受けになって、(その人が私(Ⅱ繁樹)に向かって、)『若い者たちは(どんな梅の木がよいか)見分けることはできません。おまえが探してこい。』とおっしゃったので、(私は)都中を歩き回りましたが、(適当な梅の木が)ございませんでしたので、西の京のどこそこにある家に、(花が)色濃く咲いている(梅の)木で、枝ぶりのみごとなものがございましたのを、掘り取ったところ、(その)家の主人が、『木にこれを結び付けて(内裏に)持って参上しなさい。』と(召し使いに)言わせなされたので、何かわけがあるのだろうと思って、(内裏へ)持って参上しましたのを、(天皇が)『(これは)何か。』とおっしゃってご覧になったところ、女の筆跡で書いてございました(歌ですが)、

勅命ですから、まことに畏れ多いことです(謹んでこの梅の木を献上します)。(しかし、いつもこの梅の木を訪れていた)鶯が(次にまたやって来て)、(私の)宿は(どうなったのか)と尋ねたならば、どのように答えたものでしょうか。

とありましたので、(天皇は)不思議にお思いになられて、『(その家は)何者の家か。』とお探らせになられたところ、(その家は)貫之殿の娘さんが住む所だったのです。(天皇は)『まことに遺憾なことをしてしまったものだなあ。』とおっしゃって、きまり悪がっていらっしやいましたよ。(この)繁樹、一生の恥辱とは、このことでもございましたでしょう。実は、『思いどおりの(梅の)木を持って参った。』というので、(こ)褒美として(衣を頂戴したの)ですが、それも(かえって)つらくなってしまうました。』と言って、にっこりと笑うのです。